

第四号

「育成」

メルマガ noichi 第四号。今回のテーマは「ジュニアの育成その一〜導き〜」。未来を担う子供達の育成について、紐解いてみたいと思います。いつの時代も、指導者にとって子供達の育成方法は永遠の課題。今回は副題「導き」とし、もう一つ焦点をしばって普遍的なテーマに切り込んでいく為の足掛かりを作ります。無限の可能性を秘める子供達。古典芸能の世界でも、今、子供達の育成方法が注目されています。子供の感性と好奇心へ働き掛ける指導者の工夫、苦勞、努力。それらは一つの『愛』となつて、子供達の進むべき道を照らす灯りとなり、導きとなります。

「先生、一つ質問があります。」

「はいはい、なんでしょう。」

「生田流は、どうして斜めに座るんですか？」

「はて、面白いこと言うね。どうしてだと思っ？」

「山田流みたいに、真つ直ぐ座ったらいけませんか？」

「はてはて、なかなか大胆だね、君は。では、

真つ直ぐ座つてやつてごらんさい。」

「はい。先生、やつぱり少し弾き難いですわ。」

「そう？ 先生は真つ直ぐ座つても弾けますよ。ほらご覧。」

「……。わあ、ホント。でも先生、やつぱり少し弾きにくそうでしたわ。」

「そうかい？ どの辺りが？」

「ええ、勿論ちゃんとお弾きになれてましたけど、なんて言うのかしら、弾く格好が少し不自然に感じましたわ。」

「それは、普段 先生が斜めに座っている姿を、君が見慣れているせいじゃないかな？」

「いいえ、そういうことじゃありませんの……、何かしら。」

「それじゃあ、今度は、もう一度、君がやつてみてごらん。」

「はい。……。ええ、やつぱり何かがへん……。あ！ わかったわ！」

「お、何がわかった？ 先生に教えて下さい。」

「爪の形ですわ、先生。生田流の爪の形が四角いから。爪の角で弾く為には、ほら、こうして斜めに座らないと。」

「そうですね。でも、真つ直ぐに座つても、爪の角で弾けますよ。」

「やだわ、先生つたら。だつて弾く格好が変じやありませんか。肘を張つて、なんだか蛇口をひねっているみたい。」

「つてことは、山田流の人は、蛇口をひねっているみたい？」

「もう、ですから爪の形なのよ、先生。山田流の爪は、三角のお山になっているじゃありませんか。真つ直ぐ座らなければ、かえつて変になるわ。」

「そうですね。だから、座り方、特に座る角度が大事なんです。」

「あら、先生、気が付いていらしたの？」

「勿論、気が付いていました。」

「知らないふりして、私をからかつてらっしゃるのかしら。」

「指導者は気が付かせ屋さん。です。」

「え？ 何て仰いました？」

「ん？ ううん。何でもありませんよ。」

「じゃあ先生、一つ質問がありますわ。座り方、爪の形、どちらが先に決まったの？」

「ん？ はて、面白いこと言うね。どっちだと思っ？」

「えっと、それは多分……。」



「日本文化」

ICDC (International Center for Japanese Culture) 主催 アマト・ジョセフ博士(雅号: 雅翔) アメリカ人でありながら日本文化を専門的に勉強させて頂いた私は、日本文化の素晴らしさを国籍を越えた一人でも多くの子供に伝え、世界中に日本文化を発信していくことの使命を感じています。

生徒達に日本文化を教える中で最も難しいことは、礼儀、作法、の大切さを伝えることです。正座すること、お辞儀すること、一つ二つを厳しくチェックしていないと、正確な日本文化は伝わらないと私は考えます。特に、先生と生徒(師匠と弟子)の師弟関係は、日本文化の中でも大事な心構えなので、態度や言葉遣いなど、厳しく指導するようにしています。

本番が近くなると、反復練習するようにプレッシャーをかけることもあります。生徒達が自主的に楽器に向って練習に励んでくれることもあります。そういう時は、生徒の楽器に対する「LOVE」を感じて、先生として最高に嬉しい瞬間です。

長く続けていく間には、「やめたい」と言ってくる生徒もあります。そんな時は、生徒と直接話をする時間を設けて、人間に必要なバランス(スポーツ、文化、専門分野、趣味)の大切さを一生懸命生徒の心に伝えます。それは、いつも生徒の心にちゃんと伝わっていると思います。これは日本には余りないかもしれない、アメリカ的な教育方法かもしれない。

お免状のこと、お名取のこと、日本文化にはまだまだ上のステップがありますが、まずは「続けてくれることが一番大事」と思って、これからもユニークに、間違いないように気を付けながら、子供達を育てていきたいと思っています。

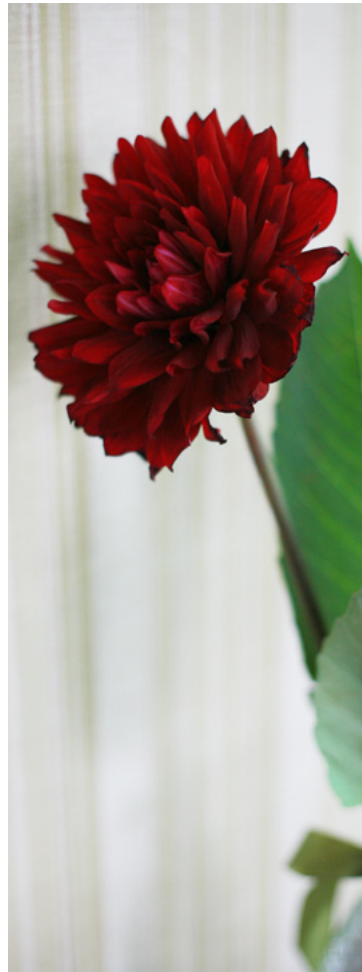
横浜インターナショナルスクールの邦楽教育プログラム

今から9年前の2003年、横浜インターナショナルスクール(横浜市)に初めて邦楽教育プログラムが取り入れられた。このプログラムはジョセフ・雅翔・アマト博士により創設され、現在も、英語で授業を行う教育カリキュラムの中に採り入れられている邦楽教育としては世界唯一のプログラムである。アマト博士はニューヨーク大学で博士号を取得、その後日本で筆を学び、現在、正派邦楽会師範。

この邦楽プログラムの成功により、日本芸術文化国際センター(略称ICJC)が新たに設立される運びとなった。ICJCの使命は、邦楽のみならず幅広く日本の伝統文化や近代芸術を振興させる、ということである。

生徒たちは英語と日本語の二カ国語で、邦楽の三つの要素である演奏、邦楽史そして邦楽理論を学んでいる。生徒たちにはICJC内外で演奏する多くの機会があり、そこで習得した演奏技術を披露することが出来る。演奏会における生徒たちの役割は、演奏だけにとどまらず、舞台構成、照明や衣装にまで及び、またICJCでの指導では、メンター・プログラムを取り入れており、先輩から筆を学び、助言を受けることができる。このような先輩後輩の関係により、生徒たちは絆の深い親密な家族のような関係を作り上げ、ICJCではこうした緊密な関係性により、毎年新しく筆を学びたいと思う下級生を多く迎え入れることが可能となっている。

邦楽が今後さらに振興するすれば、そのカギを握るのは若いグローバルな視点を持つ学生という新たな世代である、とアマト博士は考えている。何世紀もの間、この古代から続く音楽は、限られた人々による専門領域であった。ここICJCでの邦楽プログラムは、新しい道と方向性に向いている。すなわち、邦楽を世界と共有しよう、とする新たな考え方である。



タツちゃん

画家 池田俊雄

私の絵画教室に、タツちゃんが入会してきた。タツちゃんは病気。筋力が衰える病気で、高校生に成る頃には車椅子に、そして二十歳までは生きられないと聞いた。(30年も前のことだ。今は医学も進歩しているから大丈夫だろうが・・・)。

私には特別視する余裕が無かったのか、タツちゃんを普通の子供達と同じように叱り、そして誉めた。いや、他の子供達より遥かに多く叱った。タツちゃんはいつも耐えていた。

タツちゃんは、教室が終わってからのキックベースが楽しみ。しかし、筋力の弱いタツちゃんは、直ぐアウトになる。だからタツちゃんと同じチームになる子は、いつも猛烈に抗議してくる。学校では、アウトもセーフも関係ない、俺はそんなルールは認めない」と私は突っぱねた。不満一杯でゲームが始まる。

タツちゃんが打席に入ると、私は「俺に任せろー」とタツちゃんの蹴ったボールを簡単に取り、容赦なくアウトにする。仲間達は「ああー、やっぱり無理だよ。やる気もなくなるぜ」と愚痴っている。私はそれを無視し続けた。

又、タツちゃんの打席だ。タツは、力なく蹴った。私はボールを簡単に取り、しかし一塁に暴投をしてしまった。ボールが外野まで転々と飛んでいく。筋力のないタツちゃんも悠々と一塁に。仲間達はやったやったと大喜び。タツちゃんは初めてニヤリと笑った。タツがホームに還ってくると仲間達は絶叫して喜ぶ。タツちゃんもハイタッチに応じて喜びを表していた。

次の打席では、力なく蹴るも、タツは必死で走ってみせた。私は思わず暴投をして、タツちゃんをセーフにした。タツちゃんは一塁塁上でVサインをした。こんなに嬉しいことはなかった。それ以来、タツちゃんはよく走るようになった。すると、筋力が付いてきた。

タツちゃんは、四十才を過ぎた今も、元気に働いている。



子供達への思い

正派邦楽大師範 長嶺雅紫穂

最近の子供の名前は、かのん、まりん、えみり、みうとややこしい。そして日本人はいつの間にかこんなに可愛らしくなったのかと思う程美しい。そんな子供達が十四・五人も並ぶと誰が誰やら、口ももつれるし、覚えるのにひと苦労する。「○○ちゃん、もつと背中をのぼして!」と声掛けして目と目が合うようになった時からが、レッスンだと思う。ニコッと笑ってくれたら契約成立。ママはいなくてもOKです。

強制せずその子の能力を察知しながら一歩引いたり前に出たり、その加減が今では、不思議な程判る。子供達も不思議な程ついて来てくれる。十人位のグループレッスンの時、いつも少し悪ぶって弾けていない五年生の男の子に先日「今度の日曜日個人レッスンに来なさい。□□君には特

別に教えてあげるからね」と小声でささやいたら、本当に来てくれた。帰り際に「お姉ちゃん一つずつね、一人で食べたらダメよ」とお菓子を渡したら、ワルかと思っていたその子がきちんと正座して「ありがとうございます」と云ってくれた。胸がキュンとして一日中幸せであった。

箏で出会った全ての子に私は何かを伝えたい。箏のことでなくてもいい、頭の下げ方、言葉遣い何でもよい、今の母親達が手一杯で、わかっていてもそこまではまわらない、そんな人間としての、あるいは日本人としての何かを子供達に感じて欲しい。成人した折に、そして苦しい時に「お箏の先生の家で、沢山の友達とレッスンをし、その後しばらくふざけっこして、あの時は幸せだった」と勇気を出してもらえような、そんな瞬間を一人一人の胸の内に残してあげたい。

この八月最後の日曜日、娘の提案でハンバーガーのお店に行った。様子のわからない私達は娘に取り仕切られながら、ウロウロと席に着いた。若者ばかりの中で少々気恥ずかしい思いをしていたら、これも可愛らしい店員が折々に目線で私に挨拶をする。私に何か変な物でもついているのかしら、もしかしてコーラの飲み方がおかしいのかしらと、ほんのちよつと不安になりながら、でもこれからはこのようなお店にも出入りしないと、そのうち化石老人になってしまうな、等と想像していたらその店員が「長嶺先生ですね。私は△△中学校でお箏を教えていた△×です」と挨拶された。こんな雑踏の中で、と主人も娘もびっくりし、でも本当にうれしかった。この方もきつと私との出会いをよろこんで下さったのだと、陽気先生の私はハッピーでした。

「一日中お箏を弾いて暮らしたい」という十代の夢を、沢山のお弟子さんが叶えさせてくれた。みなさんありがとうございます。

お箏の先生でよかったです!

邦楽英単語講座・その三：育成

Rearing



※過日は、私の初めての個展に沢山の方にご来場頂き、ありがとうございました。これからも一生懸命描いていきます。

Illustration : urara okuda

◎あともがき◎

肥料に農薬にと手をかけてあげないと、バラは育たないと言う。西洋のものと思われがちなバラも、実は江戸時代から日本でも栽培されていて、今のバラの品種の何分の一かは日本のバラが占めている。日本原産の野バラ(ノイバラ)も西洋のバラの交配に二役かつたという話もある。

何事も西欧にならうのが常識の日本では、子どもをほめて育てるのが普通になっている。その結果、打たれ弱い子どもたちが増えていると言われる。赤ん坊のころから別の部屋で一人で寝かせて育てられる、自立心旺盛な西欧の子どもをほめて育てると、母親とべったりで育てられる日本の子どもをほめて育てるのは、同じではないはずだ。

日本人は謙虚で奥ゆかしい。日本の美も一重の野バラのようにひそやかなものだ。そんな野バラにたっぷりの肥料をあげて、農薬で大事に守って、日本の子どもたちはどんな花を咲かせるのだろうか。

グラフィックデザイナー (http://www.1938.jp) みやはらたかお

* メールマガ noichi 次号 (第五号) は特集号。対談『野坂操壽×奥田雅紫之一』を配信させて頂く予定です。